

いずみ

第 19 号

2007 年 4 月 1 日発行

(題字: 國松 明日香氏)

本郷新彫刻シリーズ 19



「オホーツクの塔」

(網走市能取岬)

ブロンズ・石・コンクリート、
高さ 11 メートル)

海洋法の制定など国際法によって
変わる沿岸漁業。

開拓先人の 100 年の苦難と業績を
たたえ、水産日本の発展を希求して
1978 年 (昭和 53 年)、オホーツクの
塔建設委員会によって建立された。

(写真・文 仲野三郎)

目 次

本郷新彫刻シリーズ 19 「オホーツクの塔」	表紙
目次 彫刻美術館展覧会・行事予定	2
彫刻美術館友の会の転機を迎えて 札幌彫刻美術館友の会会長 橋本信夫	3
アルプの語り残したものを次の世まで伝えたい 北のアルプ美術館 大島千寿子	4
テレビ・ドラマ「碌山の恋」に寄せて	5
友の会 2007 年新年会と講演会	6
新連載リレーエッセー「本郷新と私」① 渡会純价	7
ギャラリーシリーズ 14 関口雄揮記念美術館 太田市子	7
本郷新のちょっといい話 7 「白と黒の会」 仲野三郎	8
抜海の目 「不滅のわだつみ像」	9
「ブロンズトレイル構想」 高木秀二	10
2007 年度友の会総会ほか	10

本郷新記念札幌彫刻美術館展覧会・行事予定（4月—6月）

本館	記念館	散策と美術鑑賞の会	教育普及事業
平成 19 年度前期収蔵品展			
素材と多様性	花の彩り	5月12日(土) ステージⅠ 「春の円山」	5月5日(土) 子どもデー
3月31日—8月19日 本郷が素材の特性を生かし、対象を大胆に省略した石や木、樹脂、テラコッタなどの作品を展示。ブロンズ像と違った作家の遊び心が感じられ、ユーモラスな雰囲気。	3月31日—8月19日 本郷の絵画の中から花をテーマにした作品を紹介する。函館大沼公園のミズバショウなど旅のスケッチや花びんに生けた華やかな花、人物と花の組み合わせた作品が並ぶ。	6月16日(土) ステージⅡ 「初夏の大倉山」	6月30日(土) 「石狩」像を訪ねて

本郷新記念札幌彫刻美術館 札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

◇開館時間：午前10時—午後5時◇休館日：月曜日（月曜日が祝日などの場合は翌日）

◇交通機関：地下鉄東西線「西28丁目」駅下車、JR北海道バス山の手線（循環西20）3番乗り場「彫刻美術館入口」下車、徒歩10分。◇観覧料（常設展）一般300円 高大生200円小中学生無料

彫刻美術館友の会の転機を迎えて

札幌彫刻美術館友の会 会長 橋本信夫

長く北海道の芸術文化の一端を担ってきた札幌彫刻美術館が3月31日をもって栄光の歴史を閉じ、新年度から札幌市芸術文化財団に統合されて本郷新記念札幌彫刻美術館として再出発することとなった。当友の会は、この美術館の開設と同時に初代館長原子修氏の指導のもと、当時の桂信雄札幌市長を顧問に戴いて、札幌市と市民が一体となって札幌の新しい芸術文化の拠点を支援するべく組織され、発足した。以来4半世紀、「札幌彫刻美術館の活動の進展に寄与し、彫刻美術文化の向上に資する…」とする会則どおりの活動を展開し、現在に至っている。従って当会は、この美術館が今後いかなる運命に見舞われようとも、札幌市のかげがえのない彫刻芸術の殿堂としていつまでも見守り、組織を挙げて支援活動を展開する決意である。

21世紀はパブリックアーツの時代を言われている。今この新しい潮流のもとに、彫刻ファンの市民組織として街中の美の象徴たる野外彫刻にも目を向け、資料収集や清掃運動を実施しながら彫刻芸術の啓蒙とPRを図る予定である。

幸いにも過去4年間に会員数は2・5倍増加し、180名を擁するほどになった。平成19年度は美術館の運営体制の変革を機に、友の会組織についても機構改革を図り、事業活動の飛躍的發展を目指す予定である。このため従来の美術館や彫刻巡りツアーなどの事業以外に、以下の4部会の設置と活動を提案したい。

- 1 会報部会：会報「いずみ」の編集・発行
- 2 HP・DB部会：
 - a ホームページ(HP)の開設
 - b 野外彫刻の資料収集とデータベース(DB)化の推進
 - c 地図情報を活用した野外彫刻のIT検索システムの確立
 - d 彫刻ビデオの制作と配布
- 3 野外彫刻解説部会：野外彫刻の解説ボランティア養成コースを設置し、市内各所における野外彫刻の解説プログラムの立案と実施を図る。
- 4 野外彫刻清掃部会：野外彫刻清掃のモデルプログラムを企画し、市民参加による息の長い「街中の美を守ろう」運動を展開する。

これらの事業を推進するために、まず、本郷新記念札幌彫刻美術館を拠点にして職員と会員の積極的な参加と協力をお願いするとともに、さまざまなボランティア団体とも連携しながら市内の野外彫刻について資料作成、啓蒙運動やPR活動を図りたいと考えている。さらに市内の耐久文化財の清掃や維持管理についても地方文化振興のモデルプロジェクトとして草の根美術ファンとともに「野外彫刻と街中の美を守ろう」運動に取り組むことができれば幸いである。

これらのことから、友の会では平成19年度の総会に合わせ、市民文化活動の一環として、「野外彫刻と街中の美を守ろう」をテーマに、シンポジウムを開催する予定である。できるだけ多くの市民と会員の参加をお願いしたい。

アルプが語り残したものを

次の世までも伝えたい

北のアルプ美術館 大島 千寿子

オホーツク海に長く突き出た知床半島。世界自然遺産に登録されたこの半島の付け根に位置する斜里町。北のアルプ美術館がこの町にオープンして15年が経ちました。夏、秋は登山姿の見学者が多く、山岳文学誌「アルプ」を中心に展示している文学館的色彩の強い美術館といえるかもしれません。

美術館の名前にも由来する、山の月刊誌「アルプ」は哲学者串田孫一さんを編集長とし、山を文学、芸術としてとらえ、従来の山岳誌に欠けていた山の芸術誌として昭和33年に発行されました。しかし、それから25年、「アルプ」の自然の世界は失われ、300号をもって昭和58年終刊となりました。北のアルプ美術館は、この山岳文芸誌「アルプ」の精神を次の世までも伝えたい、と願って建てた美術館です。

「アルプ」を読んでいた世代には、なつかしさと青春の思い出が感じられるようです。若い人たちには「アルプ」で語られる自然観に新鮮な感動を覚える方も多く、静かに若い世代に受け継がれていることを感じます。串田孫一さんが開館に寄せてくれ

た—この美術館のあるところから、病める地球が見事に癒されて行く爽やかな緑が、まず人々の心に蘇り、広がって行くことを願っている。—この言葉を一人でも多く感じてもらいたいと思っています。

交通の便が良いとは言えないオホーツクの地です。来館者がお世辞にも多いとは言えないのですが、毎年来てくださる方も多くなりました。今後の課題としては運営の仕方、経済的な問題等いろいろありますが、「アルプ」の理念を守り、精神を

伝える場でありたいと思っています。小さな美術館ですが、居心地の良い温もりのある時間を過ごしてもらいたいと思っています。現在、美術館では2012年6月開館を目指して、2005年に亡くなられた串田孫一さんの書斎、居間の復元作業に取り掛かっております。音楽と自然を愛した哲学者、串田孫一さんの生活空間を一時でも共有できる楽しい場所にしたいと思っています。



船迫 吉江(会員)

テレビ・ドラマ「礫山の恋」に寄せて

早世した彫刻家・荻原礫山を主人公にしたドラマ「礫山の恋」が今年2月、信越放送をキーステーションにTBS系(道内ではHBC)で全国放送された。友の会では一昨年秋の信州美術館めぐりで礫山美術館を訪問しており、会員の関心も高かったにちがいない。このドラマを見た道外の会員二人に感想をお願いした。

礫山の「彫刻に秘められた愛」

小松崎景子(会員・東京)

2月3日、信越放送で「礫山の恋」が放送されました。私は礫山の絶作「女」の像が好きで、礫山美術館を何回か訪れ、あの像を長い時間をかけてみました。

約100年前の安曇野。体が弱く、30歳の若さで世を去った日本の近代彫刻の先駆者である礫山と、決して叶うことがない恋をした相馬黒光がモデルといわれる絶作「女」の像ができるまでをこのドラマは事実を基に描かれたものでした。

体が弱く、将来を思い悩んでいた礫山は、

尊敬する先輩相馬愛蔵の妻で、芸術、文化に詳しい黒光と運命的な出会いをする。黒光も自らの生き方に悩んでいた。二人は文学や芸術について話し合ううちに引かれあい、礫山は芸術の道を志し、やがてパリに行き、ロダンに師事し、彫刻家になって帰国、黒光は夫と共に東京で新宿中村屋を起こしていました。登場人物、テーマも厳しく絞られたドラマは詩のように進行、人と人との出会い、生きることのすごさの意味があると思われました。

礫山は恋をしたか

島 正孝(会員・長野)

ヨハン・セバスティアン・バッハ作曲のマタイ受難曲を聴いて、音楽を一枚の絵で表現した絵描きはいただろうか。

後世に、その名を残すほどの偉大な人物を小説やドラマ、音で表現する試みは枚挙にいとまがない。

常に我々の関心の的である荻原礫山が、テレビ・ドラマ化されるといううわさを聞き、一抹の不安と共に期待を寄せていた。

2007年2月3日、信越放送で「礫山の恋『彫刻に秘められた純愛』」が放映された。

残された手紙や作品を軸にドラマは展開する。ドラマとしては面白くても、「女」と相馬黒光をあまりにも性急に結びつける必要はなかったのではないかと、少し残念に思った。

未だオーギュスト・ロダンの影響はあるにしても、礫山が終生探し求めた永遠の美を彫刻で表現するならば、自然にあのフォルムになるだろうと私は思う。

本郷新や舟越保武の作品に接する者に、深い哀切の感情と感動、悦びと興奮、その後に来る、満ち足りた大きな沈黙の時間。

礫山が生み出した「女」に出会うたびに、同じ体験をするのは私だけではないと思う。

「礫山の恋」はこれからの芸術研究者の研究に待ちたい。

このたびの信越放送は礫山理解者の裾野を広げるのに大いに役立ったと思う。再放送を待ちたい。

友の会 2007 年新年会

講演会 木村教授(北大)が「美術館を学ぶ」強調

友の会恒例の 2007 年新年会と講演会が 1 月 20 日、札幌・ホテルオークラで行われた。新年会に先立つ講演会の講師には木村純・北大大学院教育研究科教授を迎え、「美術館を支援するボランティア活動」をテーマに、日ごろの友の会活動に役立つ有意義な話を聞くことができた。今年の新年会には竹津宜男道国際音楽交流協会副理事ら 7 人の招待者を含め、これまで最高の 67 人が参加、講演後の懇親会では全員参加のゲームなどで盛り上がった。

懇親会では橋本会長が「今年は、街の中の美を守ろう、をテーマに、芸術文化都市・札幌を発展させて行くような活動をしたい」と抱負を語った後、来賓の橋本禮三さん（画家）が「感動の心を大切に」と乾杯の音頭を取った。また、札幌市教育文化会館館長の好川之範さんが本郷新と出会ったエピソードをユーモラスに紹介、座を和ま

せた。

新年会に先立って行われた講演で木村教授は博物館・美術館の最近の動向とボランティア活動の必要性について豊富な文献や事例を紹介。さらに、友の会活動を含めたボランティアの位置づけ、役割などのほか、今春から導入される指定管理者制度の下で求められるボランティアの在り方について話した。この中で同教授は「美術館は地域住民の生涯学習のための施設であり、地域住民の「学びの場」である。同時に、ボランティアが美術館の管理運営についても積極的に利用者や住民の声を代弁して意見を述べ、美術館職員と共に施設の事業を推進していく主体として成長することがますます求められる」と述べ、「美術館で学ぶ」から「美術館を学ぶ」を目標にすることが大切だと強調した。

「花の母子像」洗う秋の日

濱 久子

大通り公園の「花の母子像」洗はむと

亀の子束子と布切れ持ちて

彫刻家の小野寺女史、ブロンズの

洗ひ方細々教へくださる

幼子を洗ふことより繊細に

ブロンズの母子像洗へり秋の半日

天空より山内壯夫見てをらむ

二十六年前建立の花の母子像

仕上げには艶出しクリーム指先に

伸ばしつ塗る頬と目元を

福井 喜美子

彫刻に親しめば園に立つ像の

清掃けふは手つだはむとす

幾年も風雨に曝され来し像に

触れつみながく青み立つまで

母子像の四肢にくぼみも懇ろに

ブラシにて拭ふ秋晴れのもと

ブロンズ像の清掃終はるを待ち居るか

木より見下ろす鴉が一羽

→ →

↑ <新連載> リレーエッセー 本郷新と私 1 渡会 純价 (版画家) ↓

↑ **「とっておきの秘話」** ↓

↑ 「わたらい君、今度の全道展の作品いいね。オレの版画と交換しないかい！」 ↓

↑ あゆ釣り行きの車中で、本郷先生から唐突に話しかけてきた。私は本田明二さん運転の助手席に ↓

↑ いたが、思わず腰をあげて振り向いた。深々と座したあの白ひげを蓄えた笑顔の本郷先生がいた。 ↓

↑ 実は、以前に全道展のポスターの原画を依頼した時、コラージュ風の立体版画で鳥の作品を出し ↓

↑ てくれた。二羽の鳥が絡み合う力強い作風で、僭越ながら力作を賛辞した。その時、ポスターにた ↓

↑ だデッサンじゃつまらないので版画に取り組んだらしく、イメージが決まってもいざ版にするのに ↓

↑ 木版では物足りないとのことで工夫を凝らした苦心の作だったようで、私が褒めたことに気をよく ↓

↑ されていた。私はすかさず「あの鳥の作品ですか？」と問うと「うん、そうだ」との返答。小躍り ↓

↑ する心を押さえながらも話は成立したのだった。本郷先生は当時、札幌・宮の森にアトリエを建て ↓

↑ るべく、度々東京～札幌を往来し多忙な日々を過ごしていたので中々お会いする機会がなかった。 ↓

↑ そのあとススキノでの出会いの折、飲みながらの会話で確約はしたのだが、交換の日時まで約束 ↓

↑ することなく病に伏され、交換は叶うことなく幻の話となってしまった。あの作品は札幌彫刻美術 ↓

↑ 館に1点残されていると思うが、2～3点刷った残りの作品は、いまいずこ？暫し無念なことであ ↓

↑ る。次回は栃内忠男さんにバトン致します。(先鞭をご容赦！) =原文のまま= ↓

← ← ← ← ← ← ← ← ← ← ← ← ← ← ← ← ← ← ← ←

ギャラリーシリーズ 14	関口雄揮記念美術館
---------------------	------------------

札幌・南区の芸術の森地区に、日展会員として活躍中の日本画家・関口雄揮の美術館がある。3千点以上に及ぶ作品の大部分を札幌で観ることができる。展示施設でありながら収蔵施設の側面を持つ美しい建物は、北海道優秀照明施設賞を受賞している。画家は埼玉県に生まれ、東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業後、日本画家では戦後初の文部省給費留学生として渡仏し、帰国後東山魁夷に師事する。

平成10年には京都・禅林寺の障壁画を3年がかりで完成し、奉納した。千葉県に住み、83歳の現在も絵筆を取り続けている。昭和45年の初来道以来、道内各地の風景を描き続け、寒い地は寒い時が一番美しいと感じ、吹雪の大地の中で長い時間座りこんで身をもって制作に打ち込むことも稀ではなかったという。館長の高田泰久さんは、画家の「北海道の絵は北海道の人に観てほしい」という一言を機に美術館設立に尽力し、平成17年7月開館に至った。年3、4回の展示替えの際に4割ほど入れ替えがあり、旅人の視点で描かれた作品を順次公開している。4月22日まで「風を尋ねて」と題して企画展が催され、作品リストの裏面には風を体感しながら四季と対話してきた画家の言葉が記されている。気軽に学芸員による作品解説を聞くことができるのも嬉しい。建物の裏手に川が流れ、ボザール橋という吊り橋が架かっている。ボザールは仏語で美術のこと。橋を渡ると札幌芸術の森美術館があり、この橋は森の中のふたつの美術館の架け橋となっていた。 (太田市子・会員)

場所 : 札幌市南区常盤3条1丁目 (芸術の森入口)	Tel 011-593-5050
開館 : 10:00~17:00(4—10月) 10:00~16:30(11—3月)	<月休>

第9話 白と黒の会

本郷新の彫刻愛好家であれば、「白と黒の会」という会をご存知だろう。

私が生まれたのは東京都世田谷区世田谷5丁目、小田急線の千歳船橋だが、そのひとつ新宿寄りが経堂駅。この経堂駅を中心にして、小田急線沿線に住む美術家とその関係者の親睦の会が白と黒の会だ。

会の発端は昭和16年ころ、経堂の市場の中にある「あさひや」という小さな飲み屋さん、当時経堂に住んでいた人たちが何となく集まって自然発生的に誕生した。当初は新制作派の会員が主体だったが、本郷新の人柄に引かれ、次第にメンバーが増え、会場も美術好きな宮司さんの好意で八幡神社になり、後には美登利寿司に移るなど、彫刻、絵、詩人、さらには美術誌関係者なども加わった。何の決まりも無い、雑談に一夜を過ごす20人を超す人たちの集まりだった。日本画家の朝倉摂さんが紅一点として、吉田芳夫さんも渋谷から移ったのを契機に参加している。

神社の宮司さんが「今度のお祭りにアンドンに絵を描いてくれませんか」とのお願いに筆を取ることもあった。

「どういうふうを描くんだい」と佐藤忠良さん。

「なんでもないよ、ほら、赤い色をこう引いて

緑をちょっと入れると唐辛子になるよ」と朝倉さん。

今、展覧会などで見ることのできる忠良さんのスケッチやデッサンの陰にこんなやり取りのあったことを知るのも楽しい。

ちなみに北海道の作家では、旭川出身の難波田龍起さんも重要なメンバーだった。

この会には会則はもちろん、会費もなかった。それでいて会合には酒肴が出て、時には温泉にも行った。これは大変不思議だが、そこが白と黒の会。

三寸四方の白い紙に黒でちょっと何かを書く、一人が2枚のノルマを果たすと財政はたちまちOKとなる。したがって、会に出なければ書き損になると出席もよかったとか。

後日、本郷新は、白と黒の会の白と黒は美術家の最低分母としての「デッサンを大切に」ということだと言っている。一人の退会者もいない和気藹々の会であった。

今もこの会はあるのだろうか。機会があれば佐藤忠良さんに聞いてみようと思っている。

抜海の目

不滅のわだつみ像

昨年12月、東京・文京区に「わだつみ記念館」が設立された。それを知ったのは道新夕刊カルチャー面のコラム「愛読書」欄だった。歌手の鳥羽一郎さんが「新版きけわだつみのこえ」(光文社)に収められた戦没学生たちの遺書を朗読したアルバムを出したことを書いていたからだ。早速、書店を2、3軒回り、1冊だけあったのを入手した。

この本の初版は1949年(昭和24年)で、56年を経て復刻版として刊行された。累積の発行部数は200万部を超えているとのこと。これはすごいことだ。

関心を持ったのは、内容をもう一度見たいということのほか、わだつみの像がわだつみ会やその刊行物の中でどのように扱われているかを知りたいと思ったからだ。

本郷新がわだつみ像の制作に着手したのは1950年3月、44歳だった。学業半ばで戦地に引っ張り出される、いやといえば獄に入れられ、どちらにしても死の方向に向かわされた。そして帰りたいけれど帰れない。そこで死ぬ者あり、傷つく者あり、その嘆き、怒り、悲しみが「わだつみの声」という本になり、それを形で表すために像を作ろうという話になったという。「芸術家の手を通して像になったということです」と本郷新は語っている。

記念碑になる彫刻にはいろいろなやり方があるが、裸体の青年全身像をもって20世紀の新しい人間像を作り上げてみたいと、13人の青年をモデルにした。

このようにして作られたわだつみの像、「わだつみの像」は略称で正式名は「戦没学生記念像」という。展覧会に出品後、12月8日に東大の庭に立つ予定だったが叶わず、3年後に立命館大に設置されたのはご承知の通り。

さて、わだつみ像はわだつみ会の中でどのように位置付けされているのだろうか。この本の巻末にある「新しい読者のために」の中では、「映画『きけわだつみのこえ』、本郷新の彫刻わだつみ像、等々、反戦平和の社会的意志の高い波頭が生まれた」と記されている。あとがきでは「象徴化したわだつみ像の制作は今でも記憶に新しい」とある。

戦後すでに60年。200万部を超える「わだつみのこえ」の発行、そして昨年の記念館の設立、これらを見たとき、本郷新の作ったわだつみ像はもはや作家だけのものではない。それは屹然(きつぜん)として立つ像を感動をもって見る人のものであり、その中に「象徴化して見る人が今でもいるのだ」ということを忘れてはならない。

今回のことで一つ課題が見つかった。それは「新刊きけわだつみのこえ」の中でも本郷新(しん)が本郷新(あらた)となっていることだ。作家が時代の潮流の中でそうしたのか、会が考えるところであったのか、会が考えるところであったのか、調べてみたいと思っている。

2007 年度友の会総会

5月19日開催へ シンポも同時

友の会の07年度総会は5月19日午前11時から、札幌市の市長公館（中央区北1西28）＝予定＝で開かれる。合わせてシンポジウム「野外彫刻と街中の美を守ろう」を開催する。

シンポジウムでは基調講演に続き、塩澤正樹札幌市市民文化部長、彫刻家・佐々木けいし、彫刻解説ボランティア・松原安男、友の会会員の桑原昭子の各氏らをパネラーに、彫刻と町の美観について話し合う。

展覧会案内

■第10回千葉彰子ながれる水のように展

4月3日―8日＝大丸藤井セントラル・スカイホール（中央区南1西3）

6月7日―12日＝アートスペース201（中央区南2西1）

■柳川育子個展

4月17日―22日＝さいとうgallery（中央区南1西3）

■南雲久美子(会員)個展

4月23日―28日＝時計台ギャラリー（中央区北1西3）

■伊藤幸子(会員)彫刻展

6月4日―24日＝STV北2条ビル1階ホール（中央区北2西2）

■第8回「グループ環」絵画展

6月5日―10日＝大丸藤井セントラルスカイホール（中央区

「札幌シニアネット」との連携で新構想進む

インターネットを利用して“生き生きシニアライフ”の実現を目指しているNPO法人「札幌シニアネット」との提携で野外彫刻の写真をデータベース化する構想が浮かび上がっている。同ネットの技術で友の会会員の仲野三郎さんが所蔵している数々の野外彫刻写真をパソコンや携帯電話の画面で見ることができるようにする計画。同ネット理事長の高木秀二さんにその夢を寄せてもらった。

ブロンズトレイル構想

札幌シニアネット理事長 高木 秀二

大通公園を散策すると、あちこちに彫像が配置されていることに気づく。作品としての鑑賞はそれなりに楽しみなのだが、誰の作品だろうか、なぜここに置かれているのだろうか、などが分かればなお楽しいのではないかと思う。

札幌を訪れる観光客が大通りの様子を見て、北海道開拓時代を想起することはかなり難しいが、少し歩いてもらうと、ここには開拓の母の像、牧童の像、漁民の像などがあり、北海道の背景も知ることができるに違いない。

もしも、どこをどうたどればそうした彫像に出合えるか、ガイドしてくれるものがあれば楽しいし、また、その彫像の説明に接することができれば、もっと興味がわいてくるに違いない。

そこで私たちはこうした情報をWebサイトに置き、携帯電話などで検索できるような仕組みを作れないかと考えたのである。

それをブロンズトレイル構想としてまとめ、間もなく公にしたいと考えている。友の会と札幌シニアネットが共同してこの構想を進め、石狩地区から手がけ、全道に広げていけないか、夢を描いているところである。

南1西4)

具象派作家14人による絵画展で、橋本禮三会員が出品

おくやみ 会員で元事務局長・副会長の西尾美津江さん(78)＝小樽市銭函＝が3月13日、亡くなりました。ご冥福をお祈りします。

札幌彫刻美術館友の会会報

「いずみ」No.19

2007年4月1日発行

札幌市中央区宮の森4-12
本郷新記念札幌彫刻美術館内
発行人 橋本信夫

編集担当

斎藤美年子 (643-7246)

大内 和 (884-6025)